

マンネリの手は自然なるからだのリズムを保つのにとても大切なが、周囲の山川草木から生命力が失せてゆく、その寒々しさが五感にしみ入る師走になると、一年の塵が堆積した心身の重さが限界に達する。ゆえに、温泉に行く。

世のちり洗う  
四万温泉。

小学生のころ、学年対抗かるた大会のクラ

ス代表メンバーとして特訓を受けた上毛かるたをいまでも覚えている。二年生のとき、五年生に勝って担任の女性教諭にほめられたものだった。だから、逃亡先はいつも上州四万温泉。

金曜日の仕事を早めに切り上げ、県境の峠を越えて宿に着くとすぐ大浴場に向かう。なめらかな肌触りの温泉が肩周辺のこわばりをほぐしてくれ、湯面近くのやわらかな蒸気を吸えば気管支が開いて常より多くの大気が肺に入り、大量の呼吸とともに、ああーと声が出てしまう。

「あ」は在るの意味で、ヒトが最初に発したことはではないかとの説を読んだ記憶がある。だとすれば、温泉につかって思わず出てしまう、ああーは、身にまとった世俗の塵を洗い落とした裸の「わたし」がいまここに無事で在

南木 佳士 作家

るのをみずから言祝ぐめでたいことはなのだ、きつと。部屋は敷きっぱなしにしてもらい、寝ころがって本を読む。純文学長篇、短篇集、エッセイ集、エンタメ小説。窓の外を流れる溪流のせせらぎを聴きながらこれらの本を交互に途中まで読んでうとうとし、露天風呂に入っ

ベテラン作家の最新作には緊張感が失せており、期待せずに持ってきた中堅作家の文章に、はっとさせられる一言半句を見つけ、エンタメ小説の奥深い面白さに驚く。他人の作品を読み終え、賞味期限ぎりぎりの獣肉みたいな、食べると危なそうだけれど旨みに惹かれてつい骨までかぶりついてしまう、あと一

毎年、帰路のなによりのはしみはJAあがつま沢田直所に寄ることで、さといわねぎ、なめこ、山採り舞音十石味噌(上野村産の麦味噌)などを買ひ込む。

雪化粧した浅間山の裾野に上州の食材を用いた妻の料理が並ぶ。十石味噌で作られたなめこ汁には、信州の平に慣れ親しんだ身に、おえのルーツはここなのだ、教えてくれる、からだの深

## 世俗の塵洗い落とす

## 湯治のナー



LIFE STRETCH

イラスト 寄藤文平



なぎ・けいし 大阪でマンガグラフィック認定医のランクアップ試験を受けた。百例(二百乳房)のX線写真を二時間で見て乳がん所見をチェックする。答え合わせでは最初のほうは完璧だが、次第に間違いが増える。視力の衰えに愕然とし、きつねうどんを食べて帰ってきた。